

ウイングカップ7参加作品

作・演出／繁澤邦明

WINGCUP

11/4(金) 7:00

「ANCHOR」

5(土) 11:00

出演／劇団うんこなまず

3:00

終演後にアフタートーク開催予定

6(日) 1:00

詳細は劇団うんこなまずのウェブサイトをご覧ください。(http://www.unkonamazu.com)

5:00

料金／一般前売 2,000 円 一般当日 2,300 円

学生 1,800 円 (前売、当日共 要学生証)

高校生以下 1,000 円 (前売、当日共 要学生証)

ウイングフィールド提携公演

構成・演出／あみゅーず・とらいあんぐる

11(金) 7:30

「女と男のしゃば・ダバ・だあ〜たおやかな風の中で〜」

12(土) 3:00

7:00

出演／あみゅーず・とらいあんぐる

13(日) 11:00

3:00

料金／一般前売 2,500 円 一般当日 2,800 円

中高生 1,800 円 (要学生証) ペア券 4,000 円 (予約のみ)

ウイングフィールドのりうち企画その 93

4人の劇作家による競作集

乗劇

「わらわら草紙」

19(土) 7:00

「楼上の老嬢」作／ピーター・ヴォドキン 翻訳・演出／押鐘絹一郎

20(日) 1:00

「らくごもの」作・演出／務川智正

5:00

「ラストダンス」作／南陽子 演出／島上亨

「おらおら草紙」作・演出／神原くみ子

出演／神原組

料金／一般前売 2,000 円 一般当日 2,300 円

高校生以下 1,500 円 (要学生証)

ウイングフィールド提携公演

作・演出／中川真一

26(土) 4:00

「survive」

7:30

27(日) 11:30

出演／遊劇舞台二月病

3:00

6:00

料金／一般前売 2,000 円 一般当日 2,500 円

学生 1,500 円 (要学生証)

ペア割 1名 1,800 円 リピーター割 500 円

冒険心が飛翔する“100人の戯空間”

ウイングフィールド

〒542-0083 大阪市中央区東心斎橋2-1-27 周防町ウイングス6F

TEL(06)6211-8427 FAX(06)6211-6312

ウイングフィールド公式サイト URL http://www.wing-f.co.jp

感無量寿経 その197

距離を取ること

緑川 岳良

ここ1、2年、演劇を観に行く回数が減りました。それは休みが合わなかったり、案内をもらうことが減ったりしたからというもありますが、何より、自分で演劇を創る機会が減ったことで、「演劇を観なくてはならない」というプレッシャーのようなものから解放されたからだと思います。そのおかげで映画や美術展など舞台以外のものに触れる機会が増え、演劇と少し距離を感じてきた頃、自分の中に面白い感覚が生まれていました。

毎回というわけではないですが、舞台を観て「うるさい」と感じるようになったのです。当然、声が大きくてうるさいと感じているわけではありません。役者が喋りすぎて台詞が耳障りだと感じるのです。会話を観ているのに「この人たちずっと喋っていてうるさい」なんて思ってしまうし、ひどい時は「何故この人たちは喋るんだろう。うるさいから黙っていてほしい」とまで思います。

これは情報量の問題なのだと思います。観劇する際、観客は一度に多くの情報を処理しなければなりません。台詞・身体的特徴・動きなど、役者から発信される情報だけでもたくさんなのに、音響照明などのスタッフワーク。加えてその劇場の持つ空気感、その土地の持つ力なんかも一斉に観客に押し寄せてきます。映画と違ってカメ

ラワークによって誘導されることもなく、絵画と違って自分のペースで鑑賞できるわけでもない。これまで意識していなかったのですが、演劇の場合観客は、一方的に決められた時間内に一方的に決められた量の情報(それも膨大な情報量)をほとんど手助けなしで取捨選択・処理しなければならないのです。そう考えると演劇を観るといのはとても高度な技術を要する行為と言えます。そのため観客としてはできるだけ的確で適切な量の情報を与えてもらいたいのですが、これがなかなか難しく、つい説明不足や説明過多になってしまふ。説明不足は観客を置き去りにするし、過剰な説明はうるさく・煩わしく思われてしまふ。

そして、台詞による表現がうるさく感じやすく、厄介なのは、観客が情報量を制限しづらいからです。視覚情報は目をそらしたり目を瞑ったりして観客側から情報の量を制限できますが、聴覚からの情報はそうはいきません。耳を塞ぐわけにもいかないし、塞いでも完全に聞こえないわけではないのです。聴覚情報は強制力を持って観客に迫っていくものなのです。

強制的に情報を受け取らせ、自分勝手な制限時間内に理解することを強要する。演劇って暴力的ですね。

そんなことを考えているうちに、言葉を用いた表現を行うことへの恐怖心や不信感といったものが自分の中に生まれ、育っているのを感じます。同時に言葉を用いない表現に対する憧れや興味が強くなり、最近ではダンスの「ダ」の字も知らないくせに、ダンスの演出を試してみたいなど思っているのです。言葉寄りの表現をしてきたと自負している身としては、我が身のことがら興味深く感じています。演劇から距離を取ることで見えたものがあるように、言葉から距離を取ることでは何が見えるのか。それを確かめ、私が見た感じのままに表現できたらいいなと思っています。

(私見感 主宰)

